

‘cannot help but do’ 型構文の初出例について

田 島 松 二

I

「・・・せざるを得ない」の意味内容をあらかず構文としては ‘cannot help but do’ 型、‘cannot help doing’ 型、‘cannot help but do’ 型がよく知られている。最初の2つは初期近代英語期に初出する慣用法である。(もともと ‘cannot help but do’ 型は今日では古風と目される。) これに対して、両者の混交型と考えられる ‘cannot help but do’ 型はアメリカ英語では早くから容認され、確立された用法であるが、イギリス英語では比較的最近まで非正用法として非難されてきたものである。¹⁾ 英米で見解の分かれるこの ‘cannot help but do’ 型は、一体いつ頃、そして英米のどちらで使われるようになったのであろうか。小論は、この語法に関する筆者なりの初出例探訪記ともいうべきものである。

II

問題の ‘cannot help but do’ 型構文は、しばしばアメリカ語法と見なされることからアメリカ生まれと思われがちであるが、これまで指摘されている最も早い例は OED (s.v. **Help** v. 11. b) に記録されているイギリス英語の例である。即ち、イギリスの小説家 Sir (Thomas Henry) Hall Caine (1853–1931) からの次例である。

- (1) 1894 Hall Caine *Manxman*. Lix. 43 She *could not help but plague* the lad.

19世紀も終わりに近い1894年の例である。OED 増補版 (1972–86) の編集者であった Burchfield (1992, p. 120) もこれを初出例と見ている。イギリス英語はともかく、アメリカ英語では早くからそれなりに確立した用法であることを考えると、もっと古い例がアメリカ英語に見つけられるのではないかと考えて、19世紀に刊行されたテキスト類を読むたびに注意してきたが、求めている例に遭遇することはなかった。膨大な文献の中で、たったひとつの表現形式を探そうとするのであるから、千載一遇の機を窺うようなものである。しかし、である。1990年代に入ると、わが国でも誰でもパソコンが使えるようになり、インターネットも普及しはじめた。筆者も18、19

¹⁾ これら3つの型に関する辞書、語法書等の見解については田島 (1995, pp. 20–24) 参照。

世紀の電子テキストを提供するサイトにアクセスしては、英米の作品から ‘cannot help but do’ 型の用例を検索、収集した。そして、その調査結果を田島 (1996) として発表した。その時点までは、先に挙げた OED の初出例より早い例はわずか3例しか見つけることはできなかった。次の (2)–(4) がそれである。

- (2) 1847–48 Elizabeth Gaskell, ‘Sexton’s Hero’ in *Howitt’s Journal*: I could na’ help but feel sorry for him, to be scorned, and I thought he’d not rightly taken my meaning, and I’d give him another chance; so I said again, and dared him, as plain as words could speak, to fight out the quarrel.
- (3) 1852 Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom’s Cabin*, Chapter 34: “But why does he put us where we *can’t help but sin?*” said the woman.
- (4) 1869 Anthony Trollope, *Phineas Finn*, Chapter 66: “I did not mean to talk nonsense, Phineas!” Then there came some one across them, and the conversation was ended; but the sound of his voice remained on her ears, and she *could not help but remember* that he had declared that her friendship was dearer to him than the friendship of anyone else.

上例 (2) は OED の初出例 (1894) より 50 年近く早い、19 世紀中頃のものである。その作者 Gaskell 夫人 (1810–65) と (4) の Trollope (1815–82) はイギリスの作家であり、(3) の Stowe 夫人 (1811–96) はアメリカの作家である。Gaskell 夫人と Stowe 夫人はほぼ同年の生まれであり、大西洋の両側でほぼ同じ時期に、それも口語体の文脈でこの構文を使ったことになる。そして、19 世紀後半、特に 1900 年前後以降、アメリカ英語で広く行われるようになったこともわかった。あくまでも印刷物に限ってのことではあるが、初出例の出現時期に関して約半世紀遡ることはできた。しかし、それがイギリス英語であることに変わりはない。拙稿発表後 15 年、この構文のことが気にはなっていたが、初出例探訪の旅は中断したままであった。

III

今日、コンピューター技術、インターネット等の進歩・発達はめざましいばかりである。従来の手作業なら一生かかっても得られないようなデータや情報が瞬時にして入手できるようになった。英語・英米文学の分野も例外ではない。古英語から現代英語に至る多種多様な電子テキスト (コーパス) が開発され、大半は無料で利用できる。文法・語法研究の分野でも、テーマによっては、人力の及ばない、圧倒的な威力を発揮すること間違いのないコーパスも公開されている。そのようなものの一つに米国 Brigham Young University の Mark Davies 教授が構築した一連のコーパスがある。比較的最近利用できるようになったものであるが、いずれも有用で信頼できるコーパスである。(詳細は <http://davies-linguistics.byu.edu/personal/> を参照されたい。) そのうちの 하나가、*The Corpus of Historical American English* (以下、COHA と略記) という歴史的アメリカ英語コーパスである。1810 年から 2009 年までに刊行されたフィクション (fiction)、大衆雑誌 (popular magazines)、新聞 (newspapers)、学術 (academic) の 4 分野の文献が 10 年ごとにバランスよく配された総語数 4 億語からなる大規模なコーパスである。1960 年代に編纂された史上最初の電子コーパス Brown Corpus がわずか 100 万語であったことを考えると隔世の感がある。

上述したように、‘cannot help but do’ 型の初出例に関しては、1850 年前後までは遡ることが

できた。今回は、4億語からなるこの大規模コーパス COHA を使って、それをさらに遡ることができるかどうかを探ってみたいと思う。小論の主たる関心は初出例あるいは初出年であるので、まず、1850年代までの用例数を10年毎にまとめて示す。年代の下の括弧内の数字はそれぞれの年代のコーパスのサイズ（総語数）である。

1810-19 (1, 181, 205)	1820-29 (6, 927, 173)	1830-39 (13, 774, 588)	1840-49 (16, 048, 393)	1850-59 (16, 471, 649)
1	2	3	49	18

これまで見つかっている最古の例がイギリスの Gaskel 夫人の1847-48年のものであるから、それ以前の用例がアメリカ英語に発見できれば僥倖と思っていたが、予想以上の生起数である。しかも、Gaskel 夫人の例より早い例が、1840年代の21例を含め、全部で27も見つかったのである。（アメリカの Stowe 夫人の例（1852）より早い例は58もある。）その27例のうち、1840年以前の例を早い順に、以下にすべて挙げる。

- (5) 1811 William Charles White (1777-1818) *The Poor Lodger*: Though one *can't help but think* the women were too barefaced to treat such a young lady as you a'ter that sort, Miss Harriet.
- (6) 1826 John Howard Payne (1791-1852) *Richelieu*: but he was so humble, so contrite, so broken hearted, that I *could not help but pity* him.
- (7) 1827 Samuel B. H. Judah (ca.1799-1876) *The Buccaneers: A Romance of Our Own Count [r]y in Its Ancient Day . . . [by] Yclept Terentius Phlogobombos [pseud] . . .* In Five Books, Volume I: I *can not help but think* it will be pleasant, when the road is particularly dusty, that we make a short excursion in the fields.
- (8) 1832 John Howard Payne (1791-1852) *Scene from an Unpublished Play*: She *can not help but know* it.
- (9) 1835 William Gilmore Simms (1806-1870) *The Partisan: A Tale of the Revolution*, Volume 2: and nothing but that high sense of military subordination which distinguished the favourite line of continentals under De Kalb's direction, could have prevented the open utterance of those discontents which they yet *could not help but feel*.
- (10) 1835 Horace Lane *Five Years in State's Prison*: I *could not help but cry* almost all the time, and the more I cried, the more they beat me.

1840年以前の例としてはこの6例のみである。いずれもフィクションのジャンルに見られる。一番早い例(5)は1811年の5幕物の戯曲（喜劇）に起こる。2例目の(6)は1826年、3例目の(7)は1827年、4例目の(8)は1832年、5、6例目の(9)と(10)はいずれも1835年の作品に見られる。（ついでながら、(6)と(8)は同一人物の使用例である。）アメリカ英語のCOHAに相当するようなイギリス英語の大規模コーパスが現時点では利用できないので、断定的なことは言えないが、‘cannot help but do’に関する限り、アメリカ英語の1811年の例は、筆者が先に指摘したイギリス英語の1847-48年の例より30数年早いことになる。これが現時点で確認できている初出例である。なお、上表によると、1810年代、20年代、30年代の用例数は少ないが、40年代に入ると急増する。10年代、20年代はコーパス自体もやや小さいが、30年代は後の他の年代とコーパスの大きさはほぼ同じであるのに用例数は少ないままである。このことは、必ずしも総語数によるも

のではなくて、30年代まではこの構文自体が未発達だったということであろう。

IV

「・・・せざるを得ない」の意を表す ‘cannot but do’ 型、‘cannot help doing’ 型という古くからの慣用法の混交型であり、今なお非正用法と見られることもある ‘cannot help but do’ 型構文は、イギリス英語はさておき、アメリカ英語では今や最も一般的な語法である。²⁾ 小論は、アメリカ英語の歴史の変遷をこれまでは考えられなかった方法で観察することを可能にした、4億語からなる大規模コーパス *The Corpus of Historical American English, 1810–2009* を利用して、その初出例を調査してみた。これまで指摘されている最古の例は OED に記録されている1892年のイギリス英語の例、それを修正した田島 (1996) の1847–48年のイギリス英語の例であった。今回の調査でそれを更に30数年遡り、1811年に、それもアメリカ英語に起こることを確認することができた。ただ、1810年に初出するとはいえ、用例数自体は10年代に1例、20年代で2例、30年代でも3例と、1830年代までは極めて限られており、しばしば見られようになるのは40年代以降である。‘cannot help but do’ 型構文は、従来考えられていたよりは遙かに早く、19世紀初頭のアメリカ英語に出現し、19世紀中葉のアメリカ英語ではかなり使われるようになっていたのではないかと、というのが一応の結論である。

いずれ、初出年については修正されることもあろうが、以上が今回の ‘cannot help but do’ 型構文の初出例探訪の顛末である。

データベース：

Davies, Mark. 2010-. *The Corpus of Historical American English, 1810–2009*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coha/>.

参考文献：

Burchfield, Robert. 1992. *Points of View*. Oxford: Oxford University Press.

OED = *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1933, 1989².

清家有希. 2011. 『‘cannot help doing’ 型とその類義型に関する英米比較研究』別府大学英文学科2010年度卒業論文.

田島松二編著. 1995. 『コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究』開文社.

田島松二. 1996. 「‘cannot help but do’ 型構文はいつ頃文献に現れたか？」*The Kyushu Review* 創刊号、47–53.

²⁾ Mark Davies 教授が編纂・公開した4億1千万語からなる現代アメリカ英語コーパス *The Corpus of Contemporary American English (1991–2010)* と1億語からなる現代イギリス英語のコーパス *British National Corpus (1980–1993)* を調査した清家 (2011, p. 6) によると、アメリカ英語では、‘cannot but do’ 型 4.7%、‘cannot help doing’ 型 39.3%、‘cannot help but do’ 型 55.6%であり、今や混合型の ‘cannot help but do’ 型が主流になっている。他方、イギリス英語では、‘cannot but do’ 型 6.5%、‘cannot help doing’ 型 72.6%、‘cannot help but do’ 型 20.9%と、従来型の ‘cannot help doing’ 型が圧倒的に多い。